

相模湾を望む根府川から早川にかけての丘陵地を実際に歩いてみると、急斜面に広がる柑橘畠と、その向こうに開ける海の眺めが、この土地ならではの風景であることを実感します。この地域では江戸時代中期以降、柑橘類の栽培が盛んに行われてきました。南向きの斜面が多く、海に近いため冬でも霜が少ないと、相模湾の海水がもたらす温暖な気候に恵まれていることが、その大きな理由です。水はけの良い痩せ地は水田や畠作には不向きでしたが、柑橘類には適しており、土地条件と作物の特性がよく合致していました。明治から昭和初期にかけては、温州みかん（写真右奥）や夏みかん（写真左手前）、甘夏などが斜面一帯に植えられ、石積みの段畠とともに独特的な景観が形づくられました。東海道線（湘南電車）のカラーも、このみかん畠の色です。

柑橘栽培が最も盛んだった時代には、収穫された果実は人力や荷車で集められ、早川駅などから鉄道貨物として首都圏へ出荷されていました。東京という巨大な消費地に近く、鉄道網を利用して鮮果を大量に送り出せる立地は、この地域の柑橘栽培を支える大きな強みでした。

しかし、現地を歩いて注意深く見ると、熟した果実が収穫されないまま樹上や地面に残り、道沿いにまで落ちている畠が少なくないこともあります。斜面には、かつて使われていた収穫用モノレールが設置されたまま、故障して動かなくなっている例も見られます。担い手の高齢化や後継者不足、急斜面での作業の過酷さ、採算の合わない価格構造が、その背景にあります。それでも樹木自体は健全で、気候や土地条件が失われたわけではありません。

この風景を前にすると、生産量だけでは測れない歴史や景観としての価値がここにあると感じます。観光や教育、小規模加工との連携など新たな関わり方が模索されれば、この柑橘景観は未来へ引き継がれていく可能性を秘めています。

（2025年12月中旬／神奈川県小田原市早川）

